

王屋山と無生老母信仰

山下 一夫

一、はじめに

王屋山は河南省済源市の西北約45kmに位置し、一般には『列子』の「愚公移山」の故事の舞台として知られている。ここはまた早い段階から神聖視された場所でもあり、特に唐の司馬承禎が「王屋山洞」を「第一洞天」としたことで、全国の洞天福地の首位に立つ特別な「道教聖地」となった^{*1}。

この王屋山の洞天は、幾つかの神仙と関連づけられている。唐の司馬承禎の『天地宮府図』では、ここの「王屋山洞」は西城王君、すなわち茅君の師である王遠が治めるとしている。しかし唐末の杜光庭の『洞天福地岳瀆名山記』では、西城王君は第三洞天に移され、かわってこちらは魏華存の師・王褒が治めるとし^{*2}、さらにこれとは別に『天壇王屋山聖跡叙』で以下のように西王母との関連が述べられている^{*3}。

黄帝は元年正月甲子の日に王屋山に席を列ねた。身を清めること三日、山頂に登り、蚩尤に勝てるよう瓊林台で上帝に祈願した。そこで上帝は王母に天壇に降るよう命じた。王母がやって来ると、黄帝は親しくお仕えした。王母はそこで東海青童君を呼び、また九天玄女も呼び、蚩尤を破る策を与えた。黄帝は命によって冀州で蚩尤を殺し、天下は収まり、海内は安泰となった^{*4}。

西城王君や王褒といった神仙は上清経を奉じる立場と関係が深く、それが唐代における洞天福地説の背景をなすことが想像されるが、そうした構想は後世になると解らなくなり、王屋山の洞天といえどもっぱら西王母ということになった。例えば明代の『王屋山志』^{*5}には「王屋山洞」「王屋洞」の名は見えず、かわりに以下三つの洞窟が挙げられている。

仙猫洞。王屋山の天壇の上にある。朝夕は五色の彩りがあり、夜には仙灯が上がる^{*6}。

王母洞。王屋山の天壇の北にある。どのくらいの深さがあるのかは解らない。新年に金竜玉簡をここに投じる。名前は、王母がここで修行して得道したと伝えられることに因む。

蓮花洞。王母洞の前下にある。泉水が湧いており、常に赤、緑、紫、白など異なる色になる。名前は、昔ある人が水を汲んだ時、中から蓮花が出て

注1…十大洞天のうち、第二洞天以下が序列と関わりがあるのかどうかは不明だが、少なくとも王屋山を第一洞天としたことについては、明確な意図があったものと思われる。鈴木健郎「「洞天」の基礎的考察」、『道教と共生思想』（田中文雄・テリー＝クリーマン編、大河書房、2008年）所収、p.223参照。

注2…大形徹「洞天における山と洞穴——委羽山を例として」（『洞天福地研究』第一号、2011年、pp.10-30）参照。

注3…『正統道蔵』本、SN969。

注4…黄帝於元年正月甲子，列席於王屋山，清齋三日，登山至頂，於瓊林臺禱上帝，破蚩尤。遂劫王母降於天壇，母既降，黃帝親供侍焉。王母迺召東海青童君，召九天玄女，授與破蚩尤之策，黃帝依命殺蚩尤於冀，天下乃無不克，海內安然。

注5…『中国道観志叢刊』第一冊（江蘇古籍出版社、2000年）所収民国間影印明刻本。

注6…王屋山の頂上付近では現在でも夜に熾火が浮かび、これを現地では「王母仙灯」と称する。
(<http://www.jiyuan.gov.cn/Contents/>)

注7…僊猫洞。在王屋山天壇上。旦夕有五彩彩，夜有僊燈。王母洞。在王屋山天壇北。淵深莫測。歲時投金龍玉簡於此。相傳王母嘗於此得道，故名。蓮花洞。在王母洞前下。出泉水。四時赤綠紫白異色。昔有人汲水，見其中蓮花出焉，故名。

注8…王母洞，即清虛小有洞天，第一洞天也。

注9…西王母，命元女授軒轅《陰符》，乃破蚩尤。相傳王母洞與瑤池相連，常有仙燈，出沒雲霄間。

注10…なお、同様の記載は乾隆五十八（1793）年刊『懷慶府志』卷二「山川・濟源泉」にも見られる。

注11…王屋漢洞、王屋唐洞，為古棲真之所。洞後有石梁，由此達八仙嶺。

注12…『濟源市志』（河南人民出版社、1993年）では、王母洞は王屋漢洞・王屋唐洞など大小様々な洞窟と繋がっているため、全体で「王屋洞」を構成すると見なしている。同書「王屋洞」の項目を参照。

図1 清虚宮王母殿の西王母

来たことに困む。（巻上「洞」）*7

投竜簡を行ったというのだから、王母洞が第一洞天と見なされたことが解るが、それは裏を返せば、王屋山においてはもはや西王母が完全に前面に出たということだろう。また清・乾隆26年の『濟源県志』では王屋山の洞窟として仙猫洞・王母洞を挙げ、後者について以下のように記している。

王母洞はすなわち清虚小有洞、第一洞天である。（巻二「山川・王屋」）*8
西王母は玄女に命じて軒轅に『陰符経』を授けた。そこで（軒轅は）蚩尤を破った。王母洞は瑤池に繋がっていると伝えられ、常に仙灯があり、空の彼方に見え隠れする。（巻十一仙釈）*9

このほか、「王屋漢洞」「王屋唐洞」なる洞窟の存在についても記している*10。

王屋漢洞と王屋唐洞は、いにしへの棲真の所である。洞の後ろに石の梁があり、ここから八仙嶺に通じている。（巻二「山川・王屋」）*11

「棲真」とは「仙人が住まう」ということだろう。漢・唐と称しているのは、古い時期に使われた洞窟であることを示唆しており、或いはこちらが司馬承禎の言う王屋山洞の可能性もあるが、第一洞天を王母洞とすることには変わりない*12。実際、2011年の調査では、現在でも山中に西王母が祀られていることや、付近の道観や廟にも「王母殿」が多く付設され、王屋山一帯は西王母信仰が盛んであることなどが解った。

ただ、詳細については後述するが、一方で洞内には「無生老母」が祀られてい



るといふ、これとは異なる事実も確認された。無生老母の名は『道蔵』に一度も現れず、一般に道教の神仙譜系に属するものとは見なされない。それがなぜ王屋山頂の洞内という、歴史的に見て「第一の道教聖地」とされる場所で祀られているのだろうか。これは今後も調査を行って検討して行くべき課題であるが、本稿ではひとまず現段階で持ち得た筆者の見通しを提示してみたいと思う。

二、王屋山の無生老母

王屋山一帯は、2009年に「世界ジオパーク」に指定されたこともあって、現在整備が進められているが、王母洞付近はほとんど手付かずで、参詣するにはかなり不便な状態にある。



図2 王屋山周辺図

注13…なお、筆者が参加した2011年8月の調査では洞内まで行くことができなかったため、洞内の様子や写真等は2011年11月の土屋・鈴木の調査に基づく。

注14…<http://www.yuncheng.com/read/book/10/1452217/30399499?rpid=10&bookid=1452217&characterid=30399499&vip=0>

下の写真は、王母洞内に祀られている無生老母の塑像である*¹³。真新しい供物やペナントから、不便な場所にあるのにも関わらず参拝客が訪れていることが解る。またペナントの「送子有功」の文字は、子宝祈願が行われていることを表している。未確認だが、ここは現在「無生老母の祖庭」と称され、毎年農

図3 王屋山の無生老母



図4 千年銀杏付近の老母殿



注14…<http://www.yuncheng.com/read/book/10/1452217/30399499?rpId=10&bookid=1452217&chapterid=30399499&vip=0>

注15…2011年 8月の調査に基づく。

暦の七月初七には廟会が行われていると言う^{*14}。

無生老母が祀られているのは王母洞内だけではない。他に、山頂に向かう参道の入口付近にも無生老母の廟があった。図二の地図の「千年銀杏」の場所のすぐ裏にある、「老母殿」である^{*15}。

中には十三幅の掛軸が掛けられ、中央に無生老母を祀り、これを取り囲むよ

うに「王母娘娘」「送子観音」など十二の女仙を配する。廟の管理に関わっている老婦人に、「この無生老母は西王母と同じものか」と聞くと、「無生老母は無生老母、西王母は西王母、その他の神もそれぞれ全く異なる神」という答えが返ってきた。なお、こうした左に六名、右に六名の女仙＝老母が並び、中央の無生老母を拝する形式は、「十二老母朝無生」と称される。



図5 無生老母の掛軸

図6 無生老母のペナント



無生老母の掛け軸の向かいには、「無生老母、求学有成」と書かれたペナントがあった。「吉利区張金花」という名が見え、济源市内に居住する女性が合格祈願を行ったものと思われる。

調査に同行してもらった济源文物局の馮氏によれば、河南省一帯には無生老母を祀った廟が非常に多く分布するという。農村部などの廟は当局の認可を受けていないことも想定され、存在を把握することは難しいが、馮氏に教えてもらったり、帰国後 Web や新編地方志などで知り得た河南の無生老母廟には以下のようなものがある。

- 河南省济源市思礼鎮の武山。山上に無生老母廟があり、付近一帯における無生老母信仰の中心地となっている。
- 河南省洛陽市嵩県の羅漢寺。大雄宝殿の東側に、無生老母を祀る「老母殿」があり、「十二老母朝無生」の塑像が安置されている。
- 河南省濮陽市徐鎮の舜帝祠。「十二老母殿」に、托山老母・黎山老母・地母・普賢老母・文殊老母・観音老母・王母・無生老母・西天老母・九竜老母・眼光老母・葉母を祀る。

- 河南省鄭州市登封市嵩山の老母洞。無極老母を中心に、太極老母・皇極老母を祀る。
- 河南省洛陽市老城区の靈官洞。主殿である王靈官を祀る靈官廟の裏に、無生老母を祀る「安陽宮」があり、「十二老母朝無生」の塑像が安置されている。



図7 靈官洞安陽宮の「十二老母朝無生」塑像^{*16}

注16…人民網 Webサイト (<http://chinapic.people.com.cn/viewthread.php?tid=378542>) より転載。

上の例を見ると、単独で祀られているケースと、仏寺や道観に付属して行われているケースがあるが、無生老母の名は仏典や道經に見えず、正式な道教や仏教の信仰とすることはできないため、いわゆる民間信仰の範疇に属するものと考えられる。

三、民間教派の無生老母

さて、この無生老母は、一般には明代以来多数出現した「民間教派」で崇拜される神として知られる。民間教派の「民間」とは、この語の一般的なニュアンスから連想される「民衆の間で行われた」という意味ではなく、仏教や道教と違って国家の公認を得られなかったことを示している。研究者によっては「民間宗教」や「秘密宗教」といった語が用いられるが、意味するところは同じである。例えば民国期に民間教派の「一貫道」の活動状況を調査した李世瑜『現代華北秘密宗教』は、かれらの主神である無生老母を以下のように紹介している。

無生老母。完全な名前は「明明上帝無量清虛至尊至聖三界十方萬靈真宰」である。また「無極老母」「育化聖母」「維皇上帝」「明明上帝」とも言い、普通には「老母」と称する。…(略)…老母は宇宙を創造した主宰神であり、「無極理天」に住んでいる。一貫道の主な崇拜対象であり、信者が最終的に赴くところなので、「根ニ帰り母ヲ認ム」と言う。東方の人民はすべて彼女の子どもだが、故郷を忘れ道に迷い、永遠に輪廻転生の苦しみを受けている。そこで彼女は大きいなる道を設けて救おうとしており、この大きいなる道が「真大道」である。彼女以外はすべて左道の雑法でしかない。——この教義は大変によくできている。母の愛を大切に思う気持ちは人類が永遠に追い求めるものである上、こうした仁愛に満ち慈悲に溢れた老母が戦乱にある世界から彼女の子どもたちを呼び戻そうというのだから、人びとは興奮し感激しないはずはない。そのため、老母は一貫道の中で大きな威信を発揮することができているのだ*17。

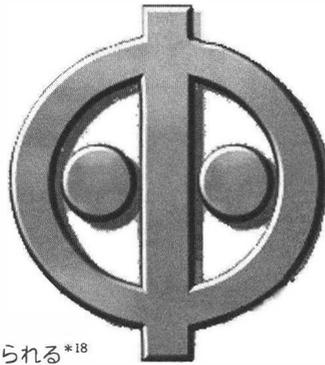


図8 一貫道における無生老母
偶像を作らず、母の字を横倒しにした記号で祀られる*18

一貫道では、無生老母はすべての神々の頂点に立つ世界の創造主であり、信者を死後その住まう無極理天に引き揚げしてくれる女神だと信じられている。こうした無生老母信仰は一貫道に限らず、黄天道・弘陽教・聞香教・八卦教・先天道など、多くの民間教派にも共通して行われている。

無生老母による救済説は、一方で「来るべき末劫において無生老母の信徒のみが救済される」という、一種のカタストロフィ説と表裏一体で説かれることが多く、民衆叛乱とも結びつきやすい性質を持っている。そのため王朝権力からは弾圧を受けたが、その際に用いられたのが「白蓮教」という呼び名である。現在でも明清時代に民間教派関わった叛乱を、日本では一般に「白蓮教徒の乱」と称しているが、ただ民間教派は基本的に白蓮教を自称していないこと、元末に紅巾の乱に加わった白蓮教と同一ではないこと、それぞれは独立した教団組織で全体として統一的な教義を有してはいないことから、近年は術語としては用いられない傾向にある。

こうした王朝権力のスタンスは、中華人民共和国でも変わっていない。中国政府は解放後、白蓮教徒は「乱」ではなく「起義」だというように、過去の民

注17…無生老母。全名叫：「明明上帝無量清虛至尊至聖三界十方萬靈真宰」；又叫無極老母，育化聖母，維皇上帝，明明上帝；簡稱老母。…(略)…老母是創造宇宙的的主宰，常住「無極理天」。為一貫道中心崇拜，即道徒的最終趨向，所謂「歸根認母」。所有東土的人民，都是她的兒女，只因失鄉迷路，永在輪迴受苦。現在她設下大道來挽救，這大道是「真大道」，除了她全是旁門雜法。此種立教的本義是很成功的，因為母愛的依戀，是人類永遠的追求，現在既有這至仁極慈的老母要從戰亂的世界裏，將她的兒女呼喚回去，怎不叫人興奮感激呢！所以老母在一貫道中是很能發揮她的威信的。

注18…http://www.with.org/index_ch.html

間教派については階級闘争の観点から評価したが、一方で目の前にある現実の民間教派については歴代の王朝と同様に徹底的な弾圧を進めた。その結果、民間教派は表に出ることができず、文化大革命の破壊を経て、現在では多くの人々の記憶からも遠ざかってしまった。

なお、各教派は全体として統一的な教義を有してはいなくても、互いに全く関連性がなかったという訳ではない。むしろ公認を得られず、同様に「民間」の立場に置かれたことで、教義や修行法が互いに浸透してゆくという側面があった。無生老母信仰もその一つで、明代中葉以降に多くの民間教派が取り上げ、共有していくことで発展し、受け継がれていったものなのである。例えば明代の民間教派の一つである黄天教の経典『普明如来無為了儀宝卷』には以下のようにある^{*19}。

注19…『民間宝卷』第二冊
(黄山書社、2005年)所収
明刻本による。

注20…見了我得無生老母，
撲在娘懷裏抱。子母們，哭
啼喚，從靈山失散了。因為
我貪心不捨，申輪迴，無歸
落，今遇著老母家書也，纔
得了無價寶。老母你是聽著，
普度眾生出波淘。老母你聽
著，無上真經最為高。

注21…『民間宝卷』第一冊
(黄山書社、2005年)所
収清刻本による。

注22…叫一聲無生父母，
恐怕我彌陀佛不得聽聞。

注23…單唸四字阿彌陀佛，
唸得慢了，又怕彼國天上無
生父母，不得聽聞。

注24…喻松青『明清白蓮
教研究』(四川人民出版社、
1987年)p.103、莊吉舜『真
空家鄉・清代民間秘密宗教
史研究』(文史哲出版社、
2002年)pp.428-432な
ど。

注25…王見川「竜華教源
流探索」、『台湾の齋教と鸞
堂』(南天書局、1996年、
pp.2-19)、p.4。

我が無生老母にまみえ、母の懷に抱かれた。母と子は泣き叫び、靈山で離ればなれになっていった。なぜなら私は貪欲の心を捨てられなかったからで、輪廻をまわり、帰り着くことがありませんでした。しかしいま老母の経典にめぐりあい、ようやく無上の価値のある宝を得ました。老母よ聞いて下さい、衆生を荒波の中からお救い下さいますよう。老母よ聞いて下さい、無上の真經こそは最高のもです。(無垢如来分第十一)^{*20}

さらに遡ると、羅教の教主である羅祖が明の正徳年間に記した『苦功悟道卷』には、無生老母に似た「無生父母」という表現が何度か使われている^{*21}。

一言「無生父母」と唱えても、阿弥陀仏には聞こえないのではないかと恐れる。(第三参)^{*22}

(人びとは)「阿弥陀仏」の四文字を唱えるのが遅いと、かの国の天上の「無生父母」が聞こえないのではないかと恐れる。(第四参)^{*23}

羅教は多くの民間教派に影響を与えた側面があるため、無生老母についてもかつては「羅祖が無生父母という神格を創出し、黄天道で女神に変わって無生老母となり、それが明末に各民間教派で受け入れられた」とする説が唱えられた^{*24}。ただ、上記の『苦功悟道卷』の記述は「一般の人々は無生父母を阿弥陀仏の謂として唱える」というやや否定的な表現と取れ^{*25}、また羅祖と同時代の西大乘教の宝卷の研究が進んだこともあり、現在では「無生老母ははじめ民間信仰で行われ、これを羅教や西大乘教などが自らの立場から解釈し、それが発展して明末の各民間教派で受け入れられた」とする説が提唱

されている*²⁶。

四、民間信仰化した無生老母

さて、中国の民間信仰では観音や呂洞賓などがよく見られるが、これらは本来は仏教や道教の神格であり、いわば「大伝統」に属するものが民間信仰に「引きずり下ろされた」結果であるといえる。民間教派は仏教や道教とは異なる存在だが、一般大衆にとっては、整備された教義や組織を有するという点であまり違いは無く、同様の事態が起こってもおかしくはない。むしろ民間教派は民間信仰に近い位置にいる分、そこに取り込まれやすいとすら言える。実際、済公活仏のように、民間教派の一つである一貫道によって台湾に持ち込まれたあと、戦後急速に広まり、現在では台湾の民間信仰の中に完全に融合してしまっている例もある。

王屋山の無生老母も同様に、もともとは民間教派で語られていた神格が民間信仰化したものと考えられる。ここで注意されるのが、道光十八（1838）年に河南省汲県（現在の新郷市衛輝市）で起こった「無生老母廟事件」である。『清史稿』巻三百八十八「桂良列伝」に以下のように言う。

嘉慶年間に起こった林清・李文成らの八卦教の乱はすでに鎮圧されたのにも関わらず、汲県潞州屯では墳墓や塔に「無生老母」と記して祀り、多くの者がこの教を習っている。そこで御史の黄爵滋は桂良に命じて取り締まり、その墳や廟を壊させた。調査した結果、河南には無生廟が三十九カ所もあったので、いずれも破壊した。地方官は監督不行届につき、譴責のうえ降級とした*²⁷。

河南で無生廟が三十九カ所見つかったというのは、現在の王屋山一帯に無生老母を祀る廟が分布していることと繋がる可能性が高い。ところで一般的な「白蓮教案」は、首謀者の供述や使用されていた宝巻の押収によって、どの民間教派組織が起こしたのかが判明することが多いが、この事件は少々様子が異なっている。『清史稿』では嘉慶十八（1813）年に叛乱を起こした林清・李文成の残党であるかのように書かれ、実際に当時天理教*²⁸が河南の滑県で騒乱を起こした際、用いられた刀鎗が汲県の鉄舖・張老一の作ったものだったため、一応はこれに関連した事件ということになる*²⁹。しかしそれから25年も経っている上、宝巻も押収されておらず、首謀者として捕縛された廟主の郝發文という人物の以下の供述からも、特定の教派との関わりは見えない*³⁰。

注26…浅井紀「明代中期華北における民間宗教の形成」、『東方宗教』第110号（日本道教学会、2007年）、pp37-56。

注27…嘉慶中、林清、李文成等以八卦教倡亂、既誅、而汲縣潞州屯墳塔猶祀其神曰「無生老母」、習教者猶眾。御史黃爵滋以為言、命桂良察治、毀其墳廟、廉得河南境內無生廟三十九所、並毀之；地方官失察、譴黜有差。

注28…『清史稿』で「八卦教」と言っているのは、天理教が八卦教に由来するためである。無論、同名の日本の宗教団体とは関係がない。

注29…莊吉發前掲書、p.436。

注30…『奏摺檔』「道光十八年十月河南巡撫桂良奏摺」（台北故宮博物院所藏）、莊吉發前掲書 p.438。

注31…潞州屯廟宇，創自前期，由來已久，廟門扁額，原係三藏庵，因廟內第四進供奉女像，相傳呼為無生老母，亦有稱此為老母廟者，每年正月初八日，附近鄉人，來廟燒香，間或攜帶鑼鼓，此往彼來，不過晡午俱散，從未見有作會誦經，夜聚曉散之事，其廟墳塋，傳聞係已故僧人墳墓，歷年以來，並無祭掃之人。

注32…莊吉發前掲書、p.436-438。

潞州屯の廟は先の王朝の時に作られ、長い歴史を有する。廟門の扁額はもと「三藏庵」と書かれていた。廟内に並ぶ四番目の女性像が無生老母と称すると伝えられるため、この廟を老母廟と呼ぶものもいた。毎年正月初八日に、付近の住民が廟にやってきて焼香し、中には銅鑼や太鼓を持って巡回するものもいるが、昼にはいなくなる。読経を行い、夜中に集まるなどということは、今まで見たことがない。廟の墳墓はすでに亡くなった僧侶の墓と聞いており、参拝者などこれまで全く来ていない^{*31}。

もちろん、供述では上手く逃れたが、郝發文はやはり八卦教の信者で、三十九カ所の廟もすべてこれに関係し、宝巻も単に偶然押収を免れただけ、という可能性もある。しかし本当に郝發文の供述通りだとすれば、ここにあったのは現在の王屋山や一帯の無生老母廟とも似た、いわば「普通の廟」に過ぎない。なお潞州屯の廟の由来について、取り締まった黄爵滋が調査結果を「邪教根源実蹟」として纏めており、おおむね以下のような内容を記している^{*32}。

明代に滑県の何氏という女性が無生老母の転生を名乗り、これと飄高祖と称する山西の高揚という者が結託して經典を作って、宦官と通じた。明の潞王朱翊鏐は宦官を信用し、したい放題にさせたため、宦官は自分の奉じる無生老母の墳墓と廟を建てた。後者は扁額に「三藏庵」と記す。

飄高祖とは民間教派の一つ・弘陽教の教主で、万曆二十二（1594）年に開教し、「民間」でありながら北京の宮廷に支持者を得て、万曆二十六（1598）年に没した。朱翊鏐は隆慶帝の第四子、万曆帝の弟で、万曆十七（1589）年以降、北京から汲県に移って潞王府を構え、万曆四十二（1614）年に没した。そうすると、潞王府の宦官の中に弘陽教の信者がいて、これが北京から無生老母信仰を汲県に持ち込んで廟を建てた、ということになるだろう。

道光年間はそのから200年以上経っている。潞王はその後朱翊鏐の子・朱常滂が嗣いだか、崇禎十七（1644）年の李自成軍による汲県占領に際し、一族とともに杭州に逃れた。潞王府は消滅したにもかかわらず、無生老母の墳墓と廟が残ったことは、郝發文の供述や黄爵滋の調査からも解るが、同時にそこに弘陽教らしき要素も見出せないで、恐らくこれは土着化して地域の民間信仰となったと思われる。前章で見たように、無生老母がもと民間信仰に由来しているとすれば、逆に民間教派の教義を削ぎ落として「元に戻る」こともそう難しいことではないだろうし、そもそもそこに本来の民間信仰としての無生老母のレイヤーが上から被さった可能性もある。そうして「危険性」は無くなったにもかかわらず、「無生老母＝白蓮教」と思い込んだ黄爵滋が廟を取り締まり、河南中の無生老母廟も壊して回ったというのが、この事件の真相だ

ったように思われる。

五、おわりに

明代に王屋山に登り、王母洞の様子を記した遊記の類は幾つかあるが、無生老母について触れているものは無い^{*33}。「邪教の神」ということで、敢えて触れられなかった可能性も無いわけではないが、恐らく当時は本当に無生老母が祀られていなかったのだろう。そうすると——ここから先はあくまでも推測に過ぎないが——河南の無生老母の信奉者たちが、黄爵滋によって破壊された汲県の墳墓と廟のかわりに王屋山を選び、ここを「聖地」としたという可能性もあるのではないだろうか。

王屋山の神秘的な姿は「聖地」として誰の眼にも解りやすいし、また従来祀られてきた西王母も、領袖的地位にある女神という点で無生老母と性質がよく似ていて、実際戦後の台湾では両者は習合している。ただ、無生老母信仰の側で「十二老母朝無生」の枠組で西王母を従属的地位に取り込んだためもあって、西王母信仰は無生老母に塗りつぶされることなく別に存続し、その結果「西王母と無生老母は別」となっているのだろう。

これは見方を変えれば、民間教派に由来する民間信仰が「道教」を乗っ取ったということでもある。王屋山は「道教第一洞天」ではあっても、唐代の洞天福地説が一般に理解されなくなったため、由来の異なる別の民間信仰が入り込んできて、これと置き換わったのだろう。それにしても、第一洞天として道教聖地の頂点に立っていた王屋山が、神々の頂点に立つ無生老母の居所に変わったというのは、実に上手くしたものだと思う。

ただ、これはまだ現段階における見通しに過ぎない。民間信仰としての無生老母の性質を明らかにするためには、さらに広く現地調査を行わなければならないし、また「十二老母朝無生」の性質についても検討する必要があるが、こうした問題については今後の課題としたい^{*34}。

注33…王圻・王思義「王屋山」、李濂「游王屋山記」、何塘「王屋山天壇玉皇廟記」、都穆「游王屋山記」、唐樞「游王屋山録」など。いずれも『済源市志 1990-2000』（中州古籍出版社、2011年）、下巻 p1082-1087 に収録。

注34…なお、宝巻の一種である『無生老母家書』の一部の版本には「十二朶蓮花」という韻文が収録されており、これが清代後期における「十二老母朝無生」説話の形成と関連があると思われる。